

# 夢が語る中世末興福寺一僧侶の内的生活史

——救済と解脱をめぐる——

小林 牧子

〔抄 録〕

中世末興福寺学侶、多聞院英俊が青年期から最晩年に到るまで、生涯にわたって記録し続けた夢をたどり、英俊の宗教性の深まりと、夢がどのように結びついているか、英俊の求道を夢がどのように照らし、導いたかを跡づける。

英俊の人生は、夢との関連で三時期に分けられる。人生前半、人生後半・前期、最晩年である。人生前半に生涯の方向性を決定づけるような重要な夢をいくつか見ている。とくに、寺内でさまざまな困難と遭遇し、離寺を決意したとき、夢中に聞こえてきた一首の歌は、離寺の断念にとどまらず、生涯を方向づけるような深いメッセージを彼にもたらす。

人生後半の約20年間は英俊の迷いの時期といえるが、夢は迷いのなかで苦悩する英俊の深層の心を照らし続ける。そしてその迷いのなかから、最晩年、英俊は深い安心の境地をえた。夢はその心象風景を表現している。

**キーワード** 多聞院英俊、多聞院日記、夢幻記、夢の比喩性・象徴性、救済と解脱

## はじめに

夢定という言葉がある。『観経疏』のなかで善導によって使われている。善導は同書の末尾に、同書執筆前、執筆中、執筆後に自らの見た夢の内容を記しているが、執筆中には夜毎、夢中に一人の僧があらわれ、導いてくれたという。善導の流れをくむ鎌倉新仏教の祖師たち(法然、親鸞、一遍)はいずれも、夢告によって自らの進むべき道を示唆されている。一遍は語録で「夢に(仏を一筆者注)見るに、まことなる事あり。このゆえに夢は六識を亡じて、無分別の位に見るゆえなり<sup>(1)</sup>」と、夢定・夢中見仏が何ゆえに真であるかを語っている。

一方、これら祖師たち、あるいは『夢記』を記した明恵のような高僧だけではなく、中世という時代は、多くの庶民たちもまた、夢と共に生きた時代であった。人々は全国各地に設けられた参籠所に参籠し、自分の意識では知ることのできないことを、夢が知らせてくれることを祈願した。夢は彼らにとって神仏のメッセージを伝えてくれるものであった。

この小論の夢見者、英俊は、上記祖師たちと、夢を請うて参籠した一般庶民たちの中間に位

置しているといえる。祖師たちのように夢告を契機として、自らの信仰を確かなものにし、それが布教につながったとはいえ、著書によって自らの思想を伝えているわけでもない。しかし、生涯真摯に道を求め続けた僧侶である。その内的世界は夢によってのみ語られた。彼が生涯にわたって記録し続けた夢を通して、虚心に英俊の内的体験世界に触れようとするとき、見えてくる世界がある。一遍のいう「無分別の位」の智慧に導かれて、より深い境位へと段階的にすすんでゆく、英俊の心の軌跡をこの小論でたどりたい。

## 第一章

### 夢に導かれて

多聞院英俊は、中世末の永正15年（1518）に生まれ、11才のとき入寺、16才で得度している。63才に権大僧都、71才には法印となり、当時の興福寺教学の実質的な中心をなした。慶長元年（1596）12月13日、79才で亡くなっている<sup>(2)</sup>。その間22才から死の年まで、生涯にわたって日記＝『多聞院日記<sup>(3)</sup>』を付け続け（30才～47才の間の日記はほぼ欠落）、そのなかには560余の夢が含まれている。

著書がなく、日記でも自らの意とするところについて、正面から論じてはいないため、文字をとおして、英俊の思想の核心に近づくことは難しいが、夢をたどることで、英俊の宗教性をその深層において捉えることができる。英俊は自らの人生に深く影響を与えた夢を通常の日記とは別に、『夢幻記』と名づけて、通年的にひとまとめにしている。この作業の意図を、「在生のあり姿書之」と記している。夢を通しての内的自伝とすることができる。

『夢幻記』のなかに英俊が記した夢以外にも、深い宗教性を感じさせる夢や、英俊の迷いの核心にふれるような夢がいくつかあり、それらの夢も含め、文章や短歌のかたちで日記に記されている英俊の思いにもときに触れながら、英俊の実像に近づいていきたい。そこには「南都北嶺の学僧」と、ややステレオタイプ化して語られがちなイメージとは大きく隔たった生き生きとした人間像が浮かびあがる。まず、『夢幻記』に載せられたいくつかの夢を記す。

〈赤童子に救われる夢〉天文3年2月3日、私が17才のときに母が亡くなった。喪に服していた3月初め、疫病に罹り瀕死の状態に陥った。師の英繁が祈禱のため大般若経を転読し、数巻の経と赤童子の像をくださった。前後不覚になり、夜、夢うつつのなかに、赤童子が現れ、「汝が学問を望むなら、一切経の御廊でやりなさい」と云われ、前後に多くいる男女の鬼たちを、杖で打ち払われた。彼らは手を合わせて詫言をいい、赤童子は「今後この者に障りをしてはならない」と云われた。鬼たちは「是非もなく請います」といい、皆直ちに帰っていった（意識）。

——この夢見を通して、英俊は死の淵から脱することができた。夢の持つ深い意味に生命の根源において出会った最初の体験であった。夢に現れて彼を救った赤童子というのは、若い

学僧が試験にパスするように守る興福寺の護法童子で、真っ赤な身体をしていて、手に持った杖の先に顎をのせている図像で描かれている。

〈英俊に離寺を思いとどませた夢〉天文15年、真俗にわたって、心に叶わぬことがあり、興福寺を離れようと心にきめた。寺を去るに当たって、久しく住んだ寺と春日社に感謝し、暇乞いをしようと、3月初めより、春日社での百日参籠を企てた。大般若經の信誼、理趣分一字三礼書写等をして、5月頃、結願近くに、夢とも現ともなく、誰の声ともなく、歌を詠むのが聞こえてきた。〈受けよなを 時雨は辛き 習ひなれど 月の宿かる 紅葉葉の露〉。そして夢から覚め、この歌は、交衆で心に叶わないことがあったとしても、神明のお運びに任せなさいと告げられたのだろう。さすがに春日社だ、と思い、離寺を思いとどまった(意識)。

——英俊29才のときの体験と夢である。英俊はその後も、何度となく、人間関係での理不尽に遭遇している。例えば53,4才ごろ、この頃英俊はすでに「御同学」(後述)であったが、前門跡、現門跡の所領配分の揉め事の調整に尽力していた。その尽力について、役得を期待しての事だと見られるようなこともあり、御同学を辞めようとしたということもあった<sup>(4)</sup>。

そのような「辛き時雨」に出会うたび、英俊はこの歌を思い起こしたようだ。日記は何度もこの夢の思い出に触れている。77才の時の日記には、「時雨下る(降る)」という天候記述のすぐ後に続けて「偽りなき世なり」と記されていて、時雨の連想から英俊に蘇ったであろうさまざまな思いが行間から伝わってくる(文禄3年10月朔日条)。当初の、辛き体験の象徴としての時雨は、時を経るにしたがい、月を映す露としてのわが心へと移りゆき、偽りなき世を生きる自らのありようへとその境位は深まってゆく。

それとともに、辛き時雨の世界と月を映す露の世界、つまり虚妄の世界と仏法の世界が興福寺には2つながら混在している。興福寺のなかに生き続けている鎌倉時代以来の南都仏教の改革の流れ、そこには自らが身を置くにたる真実がある。そう思えたとき、争いに明け暮れる「第二の世俗社会」を相対化しえたという面もあるのではないかと思える。そのような推察を可能にさせるような夢がやはり『夢幻記』に記されている。

〈師・祐算が地蔵に変容する夢〉あるときの夢に、祐算法印の御前に参じて、跪き、十念を乞い、合掌して目を閉じていたところ、南無唯識仏南無唯識仏と十返授けてくださった。ありがたく思って目を開けると、法印と思っていたのは、金色の座像の地蔵菩薩であった(意識)。

——この夢の日時を特定することはできないが 20代末の失意の時期からそれほど隔たっていない時期のものと思われる。心から信頼するに足る師と出会えた感動がこの夢にはよく現れている。生身の師、祐算のイメージは地蔵菩薩の像と重なった。祐算は英俊が36才の時に亡くなっているが、死後もしばしば英俊の夢に登場して、英俊を導いている。晩年になっての臨終の大儀も夢のなかで祐算から授かっている(文禄3年9月17日条・英俊77才——以下『夢幻記』以外の日記記事については日付と、場合によってはそのときの英俊の年齢を記す)。

〈弁才天と地蔵が英俊に合掌・礼をする夢〉春日社若宮殿のご開帳の日。御殿を拝すると、

背丈が2尺ほど、莊嚴輝くばかりの弁才天の座像が、愚身に向かって手を合わせ、3度うなずかれた。目を閉じてありがたく思い、目を開いて、もう1度お姿を拝し、拝むと、天女の上、北の方に背丈が3尺ほどの地藏菩薩が立っておられる。左右の手を肩から上にあげ、横へ錫杖を両手に持ち、合掌して、愚身に向かって、3度礼をされたところで夢から覚めた(意識)。

——46才の11月、参籠中の夢である。これも『夢幻記』に記されている。この夢は英俊のこれまで行ってきた、修行、学問が弁才天と地藏菩薩によって承認されたことを意味しているだろう。この夢までが英俊のその後の人生を方向性づけることになる、前半生の夢である。

英俊は、25才の時、参籠中に『春日権現験記絵<sup>(5)</sup>』を見る機会があり、大変感動し、「あり難き貴きこと能わず、是悲事なり」、つまり、ここに描かれているような霊験にまだ出遭えなくて、悲しいことだ、と記している(天文11年6月5日条)。当時の神仏習合的世界の中で興福寺・春日社は不可分のものとして存在していた。春日神は『慈悲万行菩薩』として『法相擁護の春日権現』と崇められていた。その春日神にまつわる数々の霊験譚が語られているのが、鎌倉期(1309年に西園寺公衡により、春日社に奉納)に作られた『春日権現験記絵』である。

『験記絵』には、多くの夢が扱われており、「或る人」の見た夢もあるが、夢を見た人の個人名が示されているものも多く、そのうちの12人は実在した人物であった。『験記絵』は特定の個人が見た霊夢の記録としての側面も持つ<sup>(6)</sup>。英俊の人生前半の夢、そして晩年の来迎の夢等(後述)は『験記絵』の続編が作成されていれば、英俊という固有名詞とともに採録されていたかもしれない夢といえる。英俊の夢と『験記絵』の夢で、テーマの共通しているものとして、神仏の力による病の治癒、離寺の断念・または帰寺、来迎などがあげられる。

## 英俊の大地性

大和の歴史は興福寺を抜きにして語ることはできない。鎌倉幕府は大和には他の国のような守護大名を置かず、その役割を興福寺に任せた。その興福寺から荘園の管理を委ねられていたのが国人、衆徒・国民といわれる人たちであった。始めは興福寺・春日社の勢力下にあったが、戦国期頃には次第に勢力をまし、戦国大名化するものもでてくる<sup>(7)</sup>。それら武士団のうちのひとつ、十市氏の一員、あるいはそれにつながる人間として英俊は生まれている<sup>(8)</sup>。

藤原氏の氏寺であった興福寺には、中世に近づくころから、摂関家につながるものが門跡を継ぐという慣わしができた。僧侶の世界は本来、脱世間の価値観に基づいて平等であるはずのところ、摂関家出身の《貴種》、公家出身の《良家》、そのいずれでもない《凡人》という、俗世の身分制のランク付けによって、扱いが大きく異なった。英俊は《凡人》であった。

伝統仏教を改革した貞慶を継承し、発展させたといわれる鎌倉期の良遍が遁世以前、興福寺学僧であった時期に、このことにたいして内部から鋭い批判の眼を向けている。良遍はまず、遮止門、つまり、僧侶が禁止すべきこととして、五つのことを挙げている。「一過差」「二放逸」「三勝負」「四追従」「五京童」であるが、第一に挙げられている「過差」がその指摘である。

《一には過差。無縁の人は、学問の志あるも住寺すること能わず。住寺の人、遂に堪任せず屢しば離寺に及ぶは、只此の事なり<sup>(9)</sup>》

鎌倉後期以降は、宗学の中心は公家出身でない学侶に移っていったとされるが、彼らは僧正、大僧正になることはできなかった。摂関家出身の僧正、大僧正を教学的に支え、導く「御同学」も、だんだんと公家出身でない学侶が担うようになったが、それは「公家出身の学侶の中に、その適任者がいなくなった<sup>(10)</sup>」からである。このような状況にある興福寺に、生涯所属しつづけた英俊が、寺内の身分制、世俗性をどのように捉えていたかは、英俊の思想をみるうえで、重要なポイントとなるだろう。ひとつの夢がある。

〈僧正の子を湯浴みさせる夢〉(前半略)東の方に2階家があるのが見え、そこに6,7歳の可愛らしい男の子が3人いる。北院の蔭山の子であろうか。僧正が手を掛けて育てられ、このように育ったようだ。「2階からおりて湯浴みをしたい」というので、愚身が1人ずつ抱き下ろしてきれいな湯殿に入れたところで目が覚めた(天正12年6月27日条・英俊67才 意識)。

——2階とはこの夢では、上層身分を象徴しているだろう。風呂があるのは1階。身分秩序の上方ではない、より大地に近い部分。そして風呂では皆はだか。はだかの世界で身分は意味を持たない。ありのままの私が顕現する。そしてなによりも、水は境界、二元、区別以前の世界を象徴する。それゆえに古来、さまざまな宗教において、水に浸ることは宗教的再生のための儀礼になってきた。そして、「温浴思想そのものが仏教によってもたらされた」とする橋本峰雄氏は、「銭湯ほど捷徑の教諭なるはなし」と銭湯を讃える式亭三馬の『浮世風呂』を引用している。「ここには独特の人間平等意識も表白されている。それは仏教的な『凡夫』観にもとづく人間平等観である<sup>(11)</sup>」。

そのような世界に上位身分の子をいざなう。そしてなにより、身分制的秩序意識から解放された、仏教的平等の世界に〈入る〉ことは子ども自身が望んでいることなのだ、と夢はいう。この夢で、子どもはその人の持つ内的可能性を象徴しているだろう。英俊にはもうひとつ、自らを風呂屋になぞらえていると思われる夢がある。(〈風呂屋の2人の子が井戸に落ちた夢〉—後述)。風呂は英俊にとって、深い象徴性をもつものであった。

英俊の仏教的平等のセンスは、人間間においてだけではなく、他の生き物との間にもはたっている。日記には飼い猫が死んだので、「妙雲禪尼」という戒名をつけたという記事がある(元龜3年8月5日条・英俊55才)。次のような夢もある。狐が懷に入ってきたので、好物の油揚げを与えたところ、狐は英俊にもその油揚げを食べるように勧めた。狐は色々なことを話したけれど、忘れてしまった(元龜3年閏正月28日 要訳)。

もっとも、寺内の差別的現実のなかで、英俊が常に俗世的価値観から自由でありえたというわけではない。69才のときには、藤原の姓を賜る夢を見ている(天正14年11月13日条)。72才には関白(秀吉)よりの使いの人が、英俊を僧正に任ずると申し付けられた夢を見ている(天正17年6月25日条)。いずれも《凡人》なるがゆえに壁に阻まれている現実を目前にしたとき



の夢であろう。

英俊が十市氏という大和の国人につながる人間であるという現実、寺内身分制というところだけではなく、寺と檀家の関係というところでも、英俊のありかたを大きく規定した。十市氏は多聞院の檀家であったが、次第に所領を奪われ、衰退してゆく。戦国大名たちの争いに駆り立てられてゆく。そのような十市氏を、英俊はさまざまな面で親身に支え続けている。倉庫として物を預かり、米・味噌などの日用品の調達にも尽力している。戦いのなかで、討死にしていく人たちも英俊にとって身近な存在である。

〈討死した源兵衛を思って泣く夢〉 昼寝の時の夢。慶賀門の北のほうで、上村よりということで、栗毛馬一匹と、神前へということで立派な緒紫糸の袈裟を納められた。若い神人がその袈裟を、これは英俊へ、ということで渡された。夢の中で、源兵衛は去年討死した、その志には切ないものがあつたと思って、袈裟を受け取りながら声を上げて泣いてしまった。目が覚めても眼には涙が浮かんでいた(永禄11年2月6日条・英俊51才 意識)。

——この夢に出てくる戦いは、おそらく、永禄10年、英俊50才のときの、三好・筒井と松永久秀の合戦のことで、このとき、奈良の町は戦火にさらされる。10月10日にはついに大仏殿・大仏像が焼失するという事態になる。当日の日記。「今夜、大仏の陣へ多聞山より討ち入り、合戦数度、ついに大仏殿が焼けてしまった。猛火天に充ち、さながら雷電の如くで、一気に傾滅してしまった」(意識)。これを機に、多くの学侶が寺を去り、英俊も、弟子たちを疎開させている。自身は疎開することなく、千日参詣を続行する。「荷物十荷余移し終えた。片時も安堵の心地はしない。愚身昨月18日よりの千日籠の間に、力及ばず命が尽きることになれば、神前で相果てるまでだ」(10月14日条 意識)。

英俊は、自らも生命の危機を感じながら修行に励み、僧侶として、討死した人々の菩提を弔っている。例えば、天正18年3月20日条の日記には、「十市城にて討死衆正命日霊供備之」と記されている。このように、乱世の只中に生きた英俊は、終世、自他の二世(現世と来世)の安穩を神仏に祈り続けている。黒田俊男氏は、乱世に生きた中世の人たちの根源的かつ現実的願望は安穩であり、国土安穩・現世安穩は仏教が上から、外から持ち込んだものというより「中世社会それ自体が求めたものであつた<sup>(12)</sup>」と主張している。英俊の自他の二世の安穩を求める心は、このような民衆の土壤に根ざしているといえるだろう。

〈年貢の夢〉 暁方の夢。百姓衆が地子を持ってきて、神人がこれを計った。先段五十石、只今五十石を納めた。(感想・重欲熾盛 悲キ事也)。(天正15年8月24日条・英俊70才 意識)。

——ここには僧侶であるにもかかわらず、年貢を生活の基盤にせざるを得ない自らのありよう、所領をめぐる争う門跡たち(前述)、そして何よりも所領争いのなかで、戦いを繰り返す戦国の世のありようを深く悲しんでいる英俊の心が表れている。

## 英俊の夢をめぐる諸説

英俊人生後半の夢の軌跡をたどる作業を始める前に、これまでに何人かの論者が英俊の夢について言及しているので、筆者が目についた関連論文・著書を以下列挙し、そのいくつかについて検討する。

- A 島田成矩「多聞院日記に見えたる夢と信仰」——白狐と舍利と人狐をめぐりて『国学院雑誌』第5巻第4号 1957年
- B 下房俊一「多聞院英俊の夢」『国語国文』437号 1971年
- C 芳賀幸四郎『中世文化とその基盤』思文閣出版 1981年
- D 河合隼雄『明恵夢を生きる』京都松柏社 1987年
- E 江口孝夫『日本古典文学 夢についての研究』風間書房 1987年
- F カラム・ハリール『日本中世における夢概念の系譜と継承』雄山閣出版 1990年
- G 河東仁『日本の夢信仰——宗敎学からみた日本精神史——』玉川大学出版部 2002年
- H 多川俊映『「多聞院日記」にみえる夢』『いのちと仏敎』日本経済新聞社 2005年

以上、8氏の所論の全てを検討する余裕が今はないので、筆者の論旨と関わるところが多く、英俊の夢にたいして独自の見方を展開している芳賀氏、河合氏の説に焦点をしぼって検討する。芳賀氏の説は、上記の多くの著者に参照されており(河合氏、江口氏、カラム氏、河東氏)、それらのなかに芳賀説にたいする批判的見解は見られない。河合氏の説にたいしては、河東氏が厳しすぎるのではないかと疑義をなげかけている。多川氏は、英俊の夢は明恵の夢と比べてとるに足らぬと評価が低く、その夢解釈には見るべきものがないとされているが(と、注で河合氏の著書を明示)、唯識の観点からすれば、そのようにはいえないだろうと指摘している。

以下、両氏の説を紹介するが、趣旨をゆがめないため、なるべく原文のままを引用する。

《芳賀説》I、仏像や仏画を拝した多くの夢があるが(99件)、それらはいずれも「儀軌に即した『莊嚴殊勝』な木仏・金仏ないし彩色の画像である。このことは、彼の現実に表象し解釈していた仏・菩薩ないし諸天が、きわめて偶像的で、かつ感覚的なものであったことを暗示するものでなければならない。法相の敎学を深くおさめ、敎理に相当精通しておりながら、しかも仏・菩薩の表象が偶像そのままであったことは、彼らの敎理の理解が意外に低級卑俗であったことを示すもので、仏敎思想史の研究上、看過してはならぬ点である」。II、英俊の夢の「大部分は福・禄・寿をえたい欲望ないし性的欲求につながるものであった。僧侶なるが故に公然とその充足を求めることが許されず、不自然に抑圧されたが故に一段と内攻し、より熾烈なものとなった」。「法相宗の敎学をおさめ、権大僧都として出世間の世界に威儀をただして生きた彼も、一皮むけば俗人とさして変わらない心的生活を送っていた」。

《河合説》I、「英俊の夢に対する態度について敢えて極論すると、それは悪しき夢判断の犠牲

というべきである。このため、彼がせっかく生涯にわたって多くの夢を記録しながら、—もちろんそこには意味深いことも生じているが—、そこから彼はあまり多くを得ていないし、われわれが読んでも興味深いものが少ないという結果になっている。「彼の夢に対する解釈の姿勢はあまりにも単純で表層的であり」、「自分の願望と現実との区別も定かでなくなるような態度をもったために、せっかく夢を記録しつつ、明恵のような個性化の過程を歩むことができなかったであろう」。II、〈夢の世に夢をたのむハ愚かなる憂身の常のならひなりけり〉という歌を英俊は63才のときに詠んでいるが、「長い生涯にわたって夢を記述し続けながら、この歌がその帰結として生じていると考えると、それはあまりにも残念な気がするのである。夢はもっと積極的な意味をもって」いる。英俊の死のイメージをあらわす朽ちた藁屋根から滑り落ちそうになる夢は「あまりにも即物的なものであり、……長年にわたって修行した僧のもつ死のイメージとしては、物足りなさを感じさせる」。

《芳賀説にたいする筆者の見解》I、英俊の夢に表れた仏像は、偶像的かつ感覚的なものにすぎないのだろうか。ここには夢がどのように心のなかの経験を表現するのかについての重要な論点が含まれている。夢は内界を伝えようとするとき、外界の具象物を借りて表現する。外界の具象物はそのとき、夢に表れた事物そのものを意味するのではなく、それによって象徴される形なき何かを表す。夢に表れる仏像も「偶像的かつ感覚的」なものを表現しているわけではなく、仏のイメージを通して、内面的なこころのありようが表されている。そうでなければ、仏典の時代から営々と「夢中見仏」が多くの仏者によって求められてきたというようなことがありえようか。更に、英俊の夢についていえば、例えば、後述する「小地藏が自坊に来られる夢」の石地藏は、夢の中で自らが石像ではない(=英俊の心)であることを暗示するようなところも見え、「儀規に即した」とは全くいえない自在にして、ユーモラスでさえある地藏である。

II、これも、夢の象徴性ということに関わるが、財貨にまつわる夢を見れば、すべて、財貨に対する欲求に結びつけ、女性が表れれば「抑圧された性的欲求」に結びつけるやり方は、英俊の夢をあまりにも狭く捉えていると考えざるをえない。もちろん、英俊も生身の人間であるから、そのような夢を見ることがあったかもしれない。問題は全てをそこに収斂させて、一皮むけば俗物と変わらないと断定するその視線の当否である。

少なくとも、第二章の「御旅所で金子を拾う夢」の金子は具象物としての金子ではなく、象徴的に英俊のそのときの心のありようを表現しているものと筆者には受け取れる(後述)。同じく第二章の「天女の来迎の夢」は「抑圧された性的欲求」がテーマの夢というより、ある宗教性を伝えようとする夢であると筆者には受け取れる(後述)。その理由についても後述する。

《河合説にたいする筆者の見解》I、河合氏の説は一言で言えば、英俊の夢解釈が正しい加減であるため、夢が深まってゆかず、明恵のように個性化の道を歩み得なかったというものである。しかし、前掲書で河東氏もいうように、「明恵がわが国における夢信仰の流れからむしろ突出してしまった人物とするなら、英俊はその流れから外れることはなかった。だがそれだからこ



そ、戦国末期における一般的な夢信仰のあり方を極めて忠実に描き出してくれる存在になりえた」といえる。更に、英俊は最晩年に個人的にも非常に深い境位に達したと筆者は考えている。筆者が恣意的にそのように考えるというというより、英俊の夢を虚心にたどれば、それらが彼の心の変容過程を自然の流れとして伝えているのを見てとることができる(後述)。最晩年、自らのみたくつかの夢の深い意味に心から気づいたとき、彼は日次記とは別に「夢幻記」を編集し、その内容は人に伝えるに値すると思えたと思われる。

II、河合氏は英俊が63才のときに詠んだ歌を取り上げ、これが人生の「帰結」に詠まれた歌だとするとまことに残念な気がするという。しかし筆者はこの歌を人生の帰結の歌ととらえるのは帰結の時点を余りに早期に置きすぎているように思う。彼はこのときはまだ迷いのなかにいる。後述するが、帰結の歌というなら75才のときの「いくたひか我見る夢を身にあてて 思ひとらぬは愚かなりける」がふさわしい。

英俊の死のイメージを表した夢についても河合氏は物足りなさを感じているが、これが最終的な死のイメージであるなら、確かにそうかもしれないと筆者も思う。しかしその後、死の年の1月に見られた「国替えを待つ夢」(第二章に詳述)は、死を待つ英俊の心の深さを表していると筆者は考える。このような点から、ユング派の用語を使うなら、英俊は個性化の道を歩んだといってよいと筆者は理解している。

## 第二章

### 千日参詣結願によせて

この章では、英俊の後半生、50代以降に焦点をあわせて、見ていく。人生後半の夢には、英俊の実存的ありようと深くかかわるテーマが含まれていて、前半の夢のように意味を了解しやすいとはいえない、比喩性・象徴性をもった数々の夢が登場する。

第一章で、英俊は大仏殿が焼失し、戦火うずまく中で千日参詣を続行したことを記したが、その結願の日が、元亀元年6月13日(英俊53才)であった。一般的に、結願の1週間程前からは、成満を期して身心潔斎がなされ、心の状態は非常に深まる。このような状況の中で、英俊はその後の人生にとって大きな意味をもつ、3つの夢を連続して見ている。

〈黒牛が二頭いる夢〉 昨日の夢。若衆とともにどこかへ旅をして、遊宴した。そして、春日社の両社の間の東の方の山には黒牛が2頭いる。(英俊の夢解き・これは丑の年を2つ経て死すべきとのお告げだろう。1つは60才、次の1つは72才に当たる)。(6月10日条 意識)。

つまり、自分は72才で死ぬだろうと、この夢から判断している。

〈頭春が死ぬ夢〉 昨日の夢。愚が発心修行し、頭春が死んだ。頭春は修行を思いとどまるべきだと再三にわたって教訓されたのを思い出す。亡くなったので不憫なことだと思った。発心は本懐、少しも後悔の心はない。とてもすっきりした気分で夢から覚めた(6月11日条 意識)。

〈風呂屋の2人の子が井戸に落ちた夢〉5,6才の風呂屋の子が2人、深さ5,6丈の井戸に落ちた。子の母親や近所の衆が助けようとしたがうまくいかなかった(6月12日条 意識)。

〈結願の日の日記〉「辛苦悩乱。朝夕片時も安穩の思いはなかった。大願は不成就だったのではないかと案じている。『行者用心集』に読経・念誦・懇丹・祈念しても、所願は成就しないといわれている。千日の読誦、種々の念誦等の修行は、徒事ということになる。そうは言っても、経文等の一字一文を称えることは神慮にかなはずである。そうした声が毛穴に入って、菩提の目となるという教えもある。今の心境は、半ば恨、半ば喜といえる。」(要訳)。

——この一連の夢、そして日記の文章からは、修行をめぐる英俊の迷いの深さ、心の揺れの大きさが伝わってくる。若衆の旅、春日社の山に遊ぶ2頭の黒牛、という躍動的イメージの夢に続くのは、井戸に落ちて死んでしまう風呂屋の2人の子という沈潜のイメージである。それはそのまま、日記に記された「半ば恨、半ば喜」という気分と重なる。なぜ、両極端ともいべき「浮・沈」のイメージを同時的に抱かざるを得なかったかについては、後に考察する。しかし、この一連の夢のなかで確かなことは、真実の出家たらんとした決意をここでしていることである。「発心は本懐」。夢はある人が死んだという表現で、その「ある人」にまつわる何か夢を見た人の心の中から消えたことを表すことがあるが、顕春は修行を積んで、発心を求めるより、学侶としてひたすら学問に励むように続けたのだろう。顕春は英俊が11歳で入寺したときから、親身に世話をしてくれたひとである。この夢を見たとき存命中である。

この時期の迷いの背景には、英俊が、貞慶以来の伝統仏教改革派の流れのなかにいたということもあるかもしれない。貞慶はあらゆる可能性の門を開くことによって、さまざまな機根の人が、できるだけ多く救済されることを願って多彩な信仰を展開する。その信仰対象は「釈迦・弥勒信仰はもちろん、これ以外にも観音・地藏・文殊・薬師・阿弥陀・虚空蔵・春日明神等々<sup>(13)</sup>」に及ぶ。けれどそれは同時に「人によって救済者が異なっており、人々は常に自分の機根にふさわしい救済者は誰なのか、おのれの願うべき浄土はどこなのか、おのれの修すべき行は何なのかを熟慮しなければならなかった<sup>(13)</sup>」ことを意味する。このように多様で、融合的な宗教環境のなかで英俊の求道は始まり、己にふさわしい道はどこにあるのかを終生問い続けた。

ところで、〈黒牛が2頭いる夢〉は、英俊がいうように、死期を告げる夢だったのだろうか。その後もしばしば、英俊はさまざまな行の結願を前にして、死期を知らせてほしいと祈願している。そして例えば、〈番〉という字が2つ書かれている夢(後述)を見ると、〈番〉の字は〈田〉のなかに〈十〉の文字があり、それが2つだから20年生きられるという意味だろうか、とか、「米の田」と書くので、米は八十八と書くから、今後20年は死なぬということか(この年、英俊69才)と考える。また、尾長鳥が3羽いる夢を見た時には「酉の年の酉の月の酉の日」が、自分の死期だと解釈する(文禄2年9月18日条・英俊76才)。

これだけ見ても分かるように、その都度の夢告(と、彼がとらえている)によって、死期は

さまざまであり、つまりそこからは、これらの夢が死期を告げるものではないだろうという推測が成り立つ。現実にも彼は72才で亡くなっていない。とはいえ、英俊がそのように考えたのは無理からぬことであって、参籠の際に夢に死期を知らせてくれるように祈る、あるいは夢が死期を伝えてくれる、というのは当時の夢信仰の通念であった。前述の『春日権現験記絵』にもこのテーマの夢は採録されている。酒井紀美は、中世の僧俗が参籠のなかなどで死期を知らせてくれるよう祈願し、その望みが叶った多くの例をあげている<sup>(14)</sup>。

それでは、この夢で牛はなぜ2頭なのか。そして、風呂屋の子はなぜ2人なのか。この時点で、推測することはむずかしい。しかし〈二〉のテーマは、その後の英俊の夢に繰り返し現れるのである。そして、それが何を意味するかは、次第に明かされてゆく。

### 繰り返し表現される 〈二〉のテーマ

- a 〈黒牛が2頭いる夢〉〈風呂屋の2人の子が井戸に落ちる夢〉(上記)
- b 〈剣が2つに割れ、中から文殊の真言が現れる夢〉剣が2つに割れて、その中から「あらはしやなふ」という文殊の真言があらわれた。2つに分かれた左右の剣の元のところには、びんずらを結った童子が1人ずついる(天正10年7月6日条・英俊65才 意識)。
- c 〈番という字が2つ書かれている夢〉昨夜の夢に何ともなく番の字を2つ書いてあるのを夢に見た(天正14年10月24日条・英俊69才 意識)。
- d 1, 観音菩薩と勢至菩薩の来迎・2, 本(もと)のない虹のような五色の輪光の夢 明け方頃の夢。本宮の南から大仏殿の東まで、5色の輪光が虹のように架かっているのが見えた。本(もと)があるはずと思い、見たが、なかった。左の方に、薄金色で腰から上が一段とふくよかですばらしい観音菩薩と勢至菩薩のお姿を拝した(天正18年正月3日条・英俊73才 意識)。夢の1場面に2つの情景1, 2が同時的に表現されている。

ここに見られるように、50代から70代はじめまでの英俊の夢には、繰り返し〈二〉のテーマが現れる。そのことから、これが英俊の深層の心に根づく、非常に重要なテーマと関連しているだろうと推察することができる。夢は〈二〉のテーマを繰り返すことによって、英俊に何を伝えようとしているのだろうか。これらの夢を、一連のものとして、虚心に眺めたとき、自ずと浮かび上がってくるあるモチーフがある。

剣が2つに割れ、中から文殊の真言が現れる。そして割れた剣の双方の根元にはそれぞれ、びんずらを結った童子、つまり春日若宮の垂迹がいる。この夢が宗教性に深く関わるものであることが知られる。おそらく、英俊の心に宿る2つの宗教性をこの夢は象徴しているように思えるが、それが本来は1つのものであることを、1本の剣が2つに割れるというイメージで表現している。次の夢には番という字が2つ現れるが、おそらく、英俊にとって、この2つに順位をつけることはむずかしい、等価である、同じ重みを持っているということを表現するため

に、数字の付いていない番という文字のみが2つ提示されたのだろうと考えられる。そして、番という字が〈つがい〉、つまり、分かちがたい2つのものという意味を持っていることもまた、夢にこの字が使われた理由といえるだろう。

次の夢で並立する2つの宗教性的内容がはじめて顕示されるが、そのひとつが西方浄土の来迎イメージ、阿弥陀如来の脇侍である観音菩薩と勢至菩薩の来迎である。

この時点で、このような来迎夢が表れた背景は、少し説明を要する。

前述したように黒牛が2頭いる夢から、英俊は自らの死期を72才とみなし、71才の暮れには「先年千日参詣結願の頃の夢のごとくなれば、来年は閉眼必定々々」(天正16年12月29日条)と記している。そして実際に、72才の7月には、死の淵にまでいくという体験をする。眩暈や、食欲不振が続くなかで、死を覚悟し、蔵書を譲り渡し、7月29日からは、死に向けての断食に入る。訪れた医者から、薬を飲むよう勧められ、「10日間断食して、死ななければ再び薬も飲む。食事再開する」と約束する。この間、借りたものを返し、臨終用意をなし終え、沐浴して、静かに死をまつ。10日を経て、死ななかったため、再び平常の生活にもどった。このときの病は60余日続いた(『多聞院日記』天正17年7月～8月の項)。

死の淵までいき、死を覚悟する、この体験はおそらく彼のその後の変容過程の原動力となっていると見てよいだろう。この体験を経てまもなくの、翌年正月から、英俊は連続的に3つの往生・救済にまつわる夢を見ている。そのひとつが、観音菩薩と勢至菩薩の来迎の夢であるが、この夢をみる前日、英俊はその後の彼の歩みを予示する、重要な一つの夢を見る。

〈お旅所で金子を拾う夢〉 今日昼寝の時、春日社のお旅所で金子を拾って袂に入れた夢を見た(天正18年正月2日条 意識)。

——中世的夢見の文化の枠内にいる英俊は、この金子が象徴的意味を持つかもしれないとは捉えず、具象物としての金子と理解し、欲が深いからこれを喜ぶのだ、と同日の日記に記している。

現代の私たちが英俊の夢と向き合おうとするとき、「英俊がこのように解釈した」ということと、「この夢は何を伝えようとしているのか」を、相対的に分けて考える必要がある場合がある。この夢は典型的にそのような夢の一つである。前述の〈二〉のテーマが現れる夢も同様である。英俊が夢のメッセージを表層意識(言語領域)では、受け止めかねることがあったとしても、夢をとおして心の変容がたどれる以上、心のどこかで受け止められたということができる。(そのような場合、夢がどこで受け止められるのかは、筆者の今後の研究課題である。現代人が英俊のように単独で、夢を記録し続け、夢に照らされ、導かれる道を歩むのは困難であり、ときには危険でもあろう。宗教性と夢が内的に深く結びつき、お互いが自らの夢を語り合う土壌があった中世と現代とでは条件が異なるだろう)。

夢の流れからみる時、金子は心的エネルギーを象徴しているとみるのが自然だろう。お旅所というのは、春日若宮おん祭りの時、神が宿る場所であり、そのような宗教的な気が充満して

いる場所で、これから始まるであろう山あり谷ありの旅に耐えられるエネルギーをもらう、という夢であると捉えると、英俊のその後の歩みととてもよくつながってくる。

ちなみに、フロイト、ユング等の夢理論も組み入れて作成されている『最新夢辞典』（どうぶつ社）によれば、金（かね）は「自分が価値をみとめているもの、人の持つ可能性やエネルギー、または個人的な資質を意味する（後略）」。

前述したように、芳賀氏は、この夢他、英俊の財貨に関わる夢を数個あげて、「僧侶であるが故に極力抑圧されていた彼の財貨への欲望のいかに強烈なものであったかが、ここに看取されよう」と指摘している。筆者のこの夢の意味づけとは大きく異なる。筆者の捉え方によれば、この夢は、これから辿る、英俊最晩年の旅の始まりを告げる。一旦死の淵にまで行った老年期の人間が、旅をやりとおすには、その旅に見合うだけのエネルギーをもって臨む必要がある。

## 救済の安心へ

〈観音菩薩と勢至菩薩の来迎の夢〉を見た英俊は「当年往生すべしとの瑞相也、本望、本望」と、感想を書き加えている。そして73才中に、引き続いて、救済につながる2つの夢を見る。

〈天女の来迎の夢〉小屋の民部に弁才天を描かせていたところ、1間余のところに1尺5、6寸の天女の坐像が雲に乗って来迎された。本地は文殊だと思ったが、釈迦如来だった。過去に福宝光明女であられたのだから、いま天女として顕われ給うのももっともだ。……お顔立ちが一段とすばらしい。左右の雲の中に童子が大勢いて、それぞれ持ち物をささげている。そして、小さな蛇が愚の足の辺から台座の下へ入ってゆくのが見えた（天正18年7月10日条 意識）。

〈行く末を案ずることはないと告げられる夢〉天正20年（18年の誤記・18年の日記にこの夢の記述あり）7月27日の暁夢に、大宮殿で勤行中、50余歳の女性が「多聞院の行末を案ずることはない。この殿の分け隔てない暖かいお心配りがあるのだから」といわれる。この殿とは大明神のことだろう。（感想・夢覚めて感涙にむせぶ。「一生の満足このことなり」）。(『夢幻記』意識)。

——常日ごろ英俊は都率天への往生を祈願しているが、夢には西方浄土からの来迎のイメージが表われる。心の深層には、阿弥陀如来の西方浄土のイメージが根づいていたといっていだろう。天女が大勢の童子をしたがえて、雲にのって来迎される。地上でそれを迎える英俊の辺から、小さな蛇が天女のほうにいく。おそらくこの蛇は「煩惱具足の凡夫」である英俊のありようを象徴しているだろう。いま迷い、苦しみの中にあるとしても、そのままの英俊を救おう、とこの夢はいつているようだ。天女が雲に乗って来迎し、その雲のなかには童子たちが大勢いる。天女の本地は釈迦如来とされている。そこには「この世」性の背後にある宗教性が暗示されている。芳賀氏のように性的な夢ととらえるだけでは、あまりに「この世」的すぎる。煩惱具足の衆生をそのまま救済する天女のイメージがこの夢の核心であると筆者は思う。



そして、あれほど二世の安穩を憑み（たのみ）奉っている大明神から行く末を案じなくてもよいと告げられる。ここでも、英俊が精進を重ねているから、あるいは学問に励んでいるからとはいわれていない。大明神の「分け隔てない暖かいお心配りゆえ」何も案ずることはないのである。「一生の満足このことなり」という英俊の感想からは、もう思い残すことはなにもない、という英俊の心が伝わってくる。これら3つの夢を通して英俊が体験することができたのは、摂取不捨の救い、無縁の大悲に身をゆだねる安心の境地であるだろう。

### 深まりゆく自己洞察

それにもかかわらず、この深い安心のわずか2週間後には、〈発心〉〈菩提心〉のテーマが再び浮上する。「今死んでも、思い残すことも一念執心もない。寺門はすっかり相果て、修学は全体相棄てる。歳はすでに73。道具は売り終わり、坊舎は朽ちる。一類にも知音にも名残惜しい人もいない。執心もまったくなくなった。ただ大明神を憑み奉るばかりである。そうではあるのだが、菩提心は起きない（天正18年8月15日条 意訳）。

日記にはこれまでも増して菩提心が起きない焦燥と絶望がくりかえし綴られ、自己洞察は次第に深まってゆく。「このごろは老屈のゆえ、露命もすでに消えかけている。昼夜絶え間なく、二世の安心を得るため、種々、発心の志を念じて忘れることがない。しかしこの志を考えると、この世を実体実法とみる妄執が猛り狂っているので、二世の心身に対して深く愛着していることから生じたものである。無我の理からいえば、幻の如き姿であるのに、そうしたことを常に思うのは、妄執があるからだ。その証拠には、夢中に見たことはすべて執着の境界である。一度として、出離した勝縁の境地の夢をみることはなかった。口では唱えていても、心が欠けていたことははっきりしている」（天正19年8月14日条・英俊74歳 意訳）。

### 神仏のメッセージを理解しえない英俊

このような徹底した自己洞察が、やがて生ずるであろう事をあらかじめ暗示しているのが、この旅の始まりに見た夢の半面、〈2、本（もと）のない五色の輪光が虹のように架かっている夢〉である。来迎のイメージに心を奪われた英俊は、このイメージに注意を向けることはなかったが、これこそが、〈発心〉に到りえない理由をつげる。二世の安心を願う心と〈発心〉のあいだに存在する距離。英俊がそれに気づいたことを示すのが前述の日記である。「心が欠けていた」と英俊がいうように、救済の安心を得て、今求められるのは心＝心の本（もと）＝心源である。夢が本（もと）のない輪光というイメージによって伝えようとしたのはそのことであった。

自らの心に救済と解脱の願いが分かちがたく存在していることに気づいたとしても、それが心の中で統合されるのは、それほどたやすいことではない。このことが、第2章のはじめの、ほぼ同時的に見られた「浮と沈」の2つの夢に反映されている。英俊の夢にはこのような形で

表現されたが、歴史上、何人かの仏教者がこのテーマをかかえてさまざまな思想を展開していることを、藤吉慈海氏が紹介している。それは藤吉氏自身の生涯のテーマでもあった<sup>(15)</sup>。英俊の心に宿る二つのテーマは、禅・念仏という実践体系によるわけ方よりも、救済・解脱、被土往生・此土入聖という内容面に焦点をあわせたほうが、同書のテーマとの共通性が見えてくる。彼の修道は、頓悟ではなく、観心を深める中で転識得智を求める唯識であり、行も多様な諸行であった。そして、春日社に二世の安穩を祈願した。

浮のイメージ(=統合の実現)につながるのは、例えば、藤吉氏自身の提唱する禅淨双修論。「われわれの学道が智慧と慈悲とを主体とする宗教的人格の形成にあることと、その方法が学行一如的でなければならぬということによるものである。禅は智に連なり、念仏は悲に道を開く。智体悲用といわれるゆえんである。この二つの道は本来は一つである<sup>(15)</sup>」。という説。

沈のイメージ(=統合の不可能性)を主張するのは白隠である。「両端に涉って修行せん人は、魚も得ず、熊の掌もまた得ず<sup>(15)</sup>」。二兎を追うものは一兎をも得ず、どちらも不徹底に終わるという。英俊の深層意識は、自らの進む道に浮・沈両方の可能性があることを見通していた。

白隠は「西方は自己の心源なり<sup>(15)</sup>」というが、英俊がこれから歩むのは「心源」を求める旅である。彼はこのプロセスを「自力」というより夢に導かれて歩む。英俊は最晩年(73才～79才)に非常に深い変容の道を歩んだが、その渦中、75才のとき歌を詠んでいる。いくたびか 我見る夢を身にあてて 思ひとらぬは 愚かなりける(天正20年9月3日条)。このような思いが『夢幻記』作成の動機になっているだろう。とはいえ、この時点でも、夢のメッセージがすべて、英俊の表層意識にまで届いたというわけではない。次の2つの夢はそのような夢である。

〈神人に、立ち去れといわれる夢〉 社頭八講の辺の座に、愚身が臥していたところ、黄衣の神人が来て、早々に立ち去れという。随分義味の法施を奉ったりして、朝夕憑み奉っているのに、なぜ去れなどといわれるのか、なんとしても、大明神にお託言をしてください、といったところ、神人は 神前にいき、戻ってきて「ご同心はなかった。早々に退出せよ」という。悲しくて、泣く泣く罷り出た。(感想・夢の如くであれば限りなく悲しい。すみやかに死すべしということなのだろう。御神の近辺に居てはならぬといわれたのは、限りなく悲しい。精進を重ねてきたが、なにが神慮に背いたのだろうか)。(天正19年8月晦条・英俊74歳 意識)。

〈厨子から弁才天、毘沙門天が消える夢〉 10日ほど前の夢に、自坊の厨子に、(いつもはある) 弁才天と毘沙門がない。扉を開けても何もない。他方に済度にお出かけか、と思い目が覚めた。(感想・愚身の所帯も消え失せてしまうのだろうかと心配だ。とはいえ、余命いくばくもないのだから、驚くこともない)。(文禄2年7月23日条・英俊76才 意識)。

——ちょうどこの時期、寝つかれぬままに明け方になり、英俊はこのような歌を詠んでいる。くさまざまに 迷い流る うらめしや 只一筋の 道知らずして(文禄2年4月18日条)。長い迷いの時期の苦悩の深さと、それを通してかすかに見えかくれする一筋の道の燭光

が感じられる。なぜ、この時期に、春日の神は、英俊に出て行けとせまり、厨子からは弁才天、毘沙門天が消えてしまったのだろう。英俊は自らの宗教性に含まれるアポリアにここで、決定的に直面させられたといえる。救済の安心を経て、発心を望むなら、神仏に憑み奉る世界を一人はなれて、(本来はそれとつながっているはずの)〈わが心〉=心源を拠り所とせよ、ということだろう。そのために大明神は神社から出てゆけとせまり、その意味を英俊が理解し得なかったので、神仏は、英俊の厨子から立ち去ってしまう。そういう「ショック療法」を経て開けた世界が、次のいくつかの夢に表現される。

### 凡仏不二の世界へ

〈毘沙門とのエロスの出会いの夢〉春日社に参詣した。南から若宮殿の前に行き、壇の西を見ると大きなお堂があり、1丈ほどの毘沙門がおられる。前へ下りて拝み奉る。顔立ちはふっくらとして桜色で、一段とすばらしい。毘沙門が3間程歩いてこられて、御手で愚僧の顔を撫でさすられ、お顔を寄せて、愚身に口をお吸わせになった。東のほうから寺僧が大勢やってきて、羨ましいことだといった。(感想・この頃『勸発菩提心集』などを読み、……厭離有為の心が深いので毘沙門天の御意にかなったのだろう)。(文禄2年12月22日条・英俊76才 意識)。

——厨子から消えた毘沙門は、このように親しく戻ってきた。エロスの出会いの表現を通して、わが心と毘沙門の不二の世界の成立が伝えられる。この夢に関する芳賀氏の説。「英俊はこの時すでに76才で、性欲はほとんど減退していたであろうけれど、青年期以来ずっと抑圧されてきた性欲が意識の下層に沈殿し、それが夢に昇華し、しかもいわゆる『夢の検閲』をごまかすため、弁才天などの女性神ではなく毘沙門天の形をとったものとも解釈される。……単純に男色と解釈してもよいであろう」(前掲書)。フロイト的枠組みを通してみれば、この夢はそうのように解釈される、ということだろう。英俊は29才のとき、精神的危機のなかで参籠し、そこで理趣分の書写をしている(前述)。理趣分は英俊にとって、青年時代から慣れ親しんだ經典であった。そこではまさに、エロスの出会いは、不二の世界を象徴するものとして、説かれている。これまで何回か、夢のメッセージと英俊の解釈のずれに言及したが、この夢では英俊は「厭離有為の心が深いので毘沙門の御意にかなったのだろう」といっている。その通りだろう。ちなみに、第一章でふれた「時雨下る。偽りなき世なり」という日記の記述は、この夢と次の夢との間の時期のものである。

〈小地蔵が自坊に来られる夢〉文禄3年11月20日(筆者注・英俊77才)、暁の夢。惣珠院の春源房が小地蔵を抱いてやってきて「大なる地蔵が小地蔵をお入れしなさいといわれた。すると御旅所で、この小地蔵が東から歩いてこられたので、このようにもってきた。石造りだが、話をされるようだ」といった。愚が「私がお抱きしましょう」というとすぐに渡された。拝すると色は黒く滑らかで、とてもすばらしい。頬を愚の頬に寄せられる。温かく、素肌のような。愚が「私どもの所へお越し下さい」というと、地蔵は「春源が腹を立てる」といわれる。「惣珠

院に置けば祟りがあると仰せられているので、置くことはできません」というと、「まことに祟り、腹が痛く気分が悪くなってきた。これでは春源のところは行けない」と同意された。寺僧4,5人が来て「その地藏を返して欲しい」という。すると小地藏が「いやこれは、大明神の仰せなのだ」といわれた。春源は残念そうだった。そこで小地藏を抱いて坂を下り、石にしては軽いなと思いながら、「われらのところへ来られたら、法談義をお聞かせ下さい」と頼み、東菩提院の橋を渡り、くきの木の内へ入ったところで目が覚めた(『夢幻記』 意識)。

——自坊はわが心の象徴であり、そこに大明神=慈悲万行菩薩の意を受けた小地藏が来られる。「わが心の内なる地藏」の顕現といえる。救われるものと救うもの(地藏)が、英俊の心のなかでひとつに結びついた。この夢について、いくつかコメントをすると、一つは春源が登場している意味である。春源は英俊と親しい学侶で、この夢を見た時点ではすでに亡くなっている。春源はおそらく英俊のなかで、迷いの時期の自らと重なっているだろう。その心のなかへは地藏は入りこめない、ということではないだろうか。そして、自坊を訪れた小地藏はなぜ軽かったのか。迷いを脱しえた英俊の心の軽安を象徴しているだろう。

## 死に向けて

〈朽ちた藁屋にすぎる夢〉 愚身が大きな藁屋の屋根にのぼり軒の下を眺めると、数丈あり、端の際にいるため落ちそうになる。浅ましく悲しいことに、掴まろうとしても踏ん張ろうとしても前後すべて朽ちた藁の屋根で、掴まってもそのまま抜けてしまう。どうしたら助かるかわからず、手足も震え、心も消え入るばかりである。(感想・死期はすでにきわまっている。一命は刹那の瞬間のものであり、それを教えてくださった大聖のご方便はまことにかたじけない)。(文禄4年2月25日条・英俊78才 意識)。

〈国替えを待つ夢〉 8月ごろに国替えの儀式であろうか、民家に大勢の侍衆が宿っている。しかし戦いのための陣取りではないようだ。作毛も豊熟のようだ。愚身も変わりが無いと見えた(文禄5年1月3日・英俊79才 意識)。

——藁屋にすぎる夢は、英俊が感想に述べている通りだろう。筆者は、英俊の最晩年の境位を現わす夢は、死の年の初めに見た、国替えを待つ夢であると思う。この夢は不思議な夢である。前の夢で、朽ちた藁屋のすぎるという形で身体の死のイメージは表現されたが、この夢では「愚僧の身も変わりが無い」という。戦いが続く乱世の只中で、「作毛も豊熟」という。ある意味で形容矛盾ともいうべき〈戦わない武士〉が登場する。武士が戦いを象徴するとすれば、この夢に登場する〈戦わない武士〉は英俊が二元対立・葛藤の世界から自由になったことを象徴している。つまりこの夢は、現象世界のことでなく、その背後にある真実の世界を映し、それが英俊の心象世界であることを伝える。

## 終わりに

夢によってのみ自らの人生(＝在生のあり姿)を語ろうとするのは、稀有の試みだといっていいだろう。それは、英俊が自らの人生にとって夢が持っている(いた)意味を、深く了解していたことを物語っている。そしてその意味は、英俊の夢と虚心に向き合ったとき、私たちにも十分に伝わってくるものである。

例えば、前述したように、英俊は最晩年(76才)に「さまざまに 迷い流るる うらめしや 只一筋の 道知らずして」という歌を詠んでいるが、この歌にどのような背景があるのかは、日記に記された夢以外のどのような記述からも浮かび上がってこない。英俊の長い間の迷いがどのようなものであったかは、夢が比喩的・象徴的表現を通して語るのみである。そしてその迷いがどのように「一筋の道」につながっていったのかも、夢のプロセスをたどることで、初めて明らかになる。

英俊の夢見の特徴として指摘できることは、それを継起的にたどれるということのほか、そのほとんどが自然に与えられた(意識的に求められ、夢が応じた例も少数存在するが)不求自得の夢だということである。修行の一環として、意図的・意識的に求められたものは少ない。このことは、易行につながる夢見の可能性を暗示しているように思われる。今後、この視点を深めて、考えてゆきたい。

### 〔注〕

- (1) 『一遍上人語録』 岩波文庫 1985年 p. 92
- (2) 他者による英俊の伝記資料は存在しない。入滅の日は現興福寺貫首、多川俊映氏によってはじめてはっきりと示された。依拠資料は寺蔵の「福園院地藏堂過去帳」である。多川俊映『『多聞院日記』を読む1』一興福寺点描 奈良新聞 平成2年5月27日
- (3) 竹内理三編『多聞院日記』 臨川書店 1978年 このうち英俊の日記は天文8年(1539 英俊22才)から慶長元年(1596 英俊79才)まで。
- (4) 幡鎌一弘 「多聞院英俊と《多聞院日記》」興福寺仏教文化講座要旨 興福寺教学部 2001年 p. 15
- (5) 小松茂美編『春日権現験記絵』『日本の絵巻』続13・14 中央公論社 1991年
- (6) 加藤悦子『『春日権現験記絵』にみられる夢の造形について』河野元昭先生退官記念論文集編集委員会『美術史家大いに笑う』ブリュッケ 2006年 p. 274
- (7) 岩城隆利『日本の仏教と奈良』明石書店 1986年 p. 123 ～p. 124
- (8) 幡鎌一弘 前掲論文 p. 2 多川俊映 前掲『『多聞院日記』を読む42』平成5年11月29日
- (9) 蓑輪顕量「中世興福寺に見られる身分意識と修学の理想—良遍の『護持正方章』を手がかりに—」大倉山論集43 大倉山精神文化研究所 1999年 p. 102



- (10) 富貴原章信 『日本中世唯識仏教史』大東出版社 1975年 p. 256 p. 296
- (11) 橋本峰雄 『くらしのなかの仏教』人文書院 1979年 p. 128～p. 129
- (12) 黒田俊男 『王法と仏法』法蔵館 2001年 p. 208～p. 217
- (13) 平雅行 『日本中世の社会と仏教』塙書房 1992年 p. 127～p. 128
- (14) 酒井紀美 『夢語り・夢解きの中世』朝日新聞社 2001年 p. 123～p. 128
- (15) 藤吉慈海 『禅と浄土教』講談社 1989年 P 224 p. 170～p. 175

(こばやし まきこ 文学研究科仏教学専攻修士課程)

(指導：福原 隆善 教授)

2008年9月24日受理